

## 「分析特集号」発刊にあたって

本誌「鉄と鋼」が特定のテーマのもとに特集を行なうようになってから、4年近くを経過し、今までに7回の特集号を発行している。そして、その間テーマは、鉄鋼の製造ならびに研究の分野を、製鉄、製鋼、加工、性質、周辺技術などに大別すれば、すでにそのすべての部門を網羅し、一部の分野では2回にもわたり採りあげられている。このような時期になつて初めて鉄鋼分析に関する特集を行なうのは、鉄鋼の製造、研究における分析の重要性を考慮するとき、いささか遅きに失したとの誹りを免がれないかもしれない。

けれど、なんといつても分析はその技術が、鉄鋼の主流をなす製鉄、製鋼、加工などの技術とは、異質な面を多分に持つているため、鉄鋼の製造、研究のほとんどすべての分野と密接、不可分の関係にありながら、技術的な面での交流の場が少なく、孤立していたともいえる状態にあつた。とかく分析技術者は内に籠りがちであり、他の分野の技術者、研究者からは敬遠されがちであつたとみるのは、単にわれわれの偏見ばかりでなく、歴史的な事実であつたと思う。近年、分析内外の情勢が変化し、この傾向は大いに改善されたとはいえ、まだ、孤立のイメージは完全には払拭されていない。このことは鉄鋼協会の会員の構成比からも窺がえると思う。会員のうち分析関係者はごくわずかで、ここでも少数派である。分析特集号を発行する意図は、特集号企画の当初からもつていたものの、上述のような従来の経緯からみて、おそらくそれが、大多数の分析関係以外の会員には興味も関心も薄いであろうことを考慮すると、慎重たらざるを得なかつたのである。

しかしながら、分析と他の分野の技術者、研究者間の相互理解の促進が、今日こそ緊要な課題であるとの視点に立てば、この問題に対応するためには「鉄と鋼」における分析特集が最も適している。また、これに重点をおくとすれば、分析という狭い専門領域の偏狭と独善に陥ることが避けられ、分析関係以外の会員の興味と関心を喚起し、広く全会員に役立てることができ、分析特集号をより一層意義あるものとすることができると思われる。このような考えかたに到達したことが、今回分析特集号をおくればせながらも、発行に踏みきらせた理由の一つであつた。

ともかく、今回その機が熟し分析特集号を発行する運びとなつたことは、「鉄と鋼」にとつても60年の歴史を顧みるとき画期的なことであり、われわれ分析に従事するものにとつても、喜びこれに勝るものはない。ただ、たまたま、その編集の任にあたる巡りあわせとなり、現在は喜びよりも責任の重さを痛感している。この記念すべき分析特集号の編集者として、われわれはかならずしも適任とは思えず、この大任が成功裡に果せるか否か疑問なしとしないが、なにはともあれ一同最善の努力を傾ける以外方

法はないとの決意のもとに、なん回かの討議をつくした末、つぎのような編集方針をたてた。

1. 鉄鋼関係の分析の学問と技術の最先端を紹介し、分析技術者、研究者に有益な情報を提供する。同時に論文以外の記事では、他の分野の技術者、研究者をも対象とし、これらの人々にも興味をもつて読まれ、分析に理解と関心をいだけてもらえるよう配慮する。

2. 従来オープンでないためあまり一般には知られていない、鉄鋼協会の事業の一つである鉄鋼関係の分析の研究機関の組織とその活動状況を紹介する。現在この分析研究機関は日本における組織的な研究の中心的存在であり、その研究成果は最先端を示すものであるといつて過言ではないと思う。その成果が鉄鋼以外の一般分析技術者にも十分利用され、研究機関の活動がさらに評価されることが必要である。この意味から本特集ではこの紹介をも重点の一つとする。

3. 分析関係の先輩および他部門の技術者、研究者から、現在の鉄鋼分析あるいは分析技術者に対する注文、意見、感想などを、なるべく数多く寄せてもらい、分析関係者の反省の資とし、相互理解に役立たせる。

このような方針を十分、かつ満足な状態で具体化するためには、われわれ編集担当者はあまりに非力であつたが、幸い宗宮、後藤両先生はじめ、分析関係各研究機関ならびに第一線の技術者、研究者各位の御賛同、御協力をえ、論文、技術資料、その他合せて 50 余編の寄稿をみ、質量ともに予期以上の特集号を組むことができた。

御賛同、御協力を賜わつた各位に深甚なる謝意を表するとともに、この特集号が今後の鉄鋼分析の学問と技術の発展の契機となり、さらに、分析と関連各部門の相互理解促進の一助となることを念じている。

編集委員	川村和郎
	須藤恵美子
	成田貴一
	広川吉之助
	若松茂雄